

## [大豆]

### 1. 作付の概況

平成 30 年度の作付面積は全国で 146,600ha となり、前年より 3,600ha 減少した（前年対比 98%）。九州では 21,400ha で、前年より 300ha 減少した（前年対比 99%）。地域別では福岡県、佐賀県、熊本県、大分県で作付面積がやや減少した。前年より作付面積が増加したのは長崎県、宮崎県、鹿児島県であった。

### 2. 作況の概況

本年は梅雨入りが九州南部、北部とも 6 月 5 日頃で、南部では 5 日遅く、北部は平年並みであった。梅雨明けは九州南部、北部とも 7 月 9 日頃で、南部で平年より 5 日早く、北部で平年より 10 日早かった。このため、播種は梅雨明け後の 7 月中後半を中心に行われ、7 月末までにほぼ終了したが、梅雨明け後から 7 月下旬まで高温乾燥の状況が続いたため、一部で出芽不良が認められたほか、初期生育が押さえられた。一方、7 月下旬に入ると降雨がみられるようになったが、8 月に入っても降水量の少ない状況が続き、生育は抑制された。また、開花期前後には台風 15 号（8/15～8/16）、19 号（8/22）の接近に伴う強風や大雨により倒伏がみられた地域もあった。9 月から 10 月の莢伸長～子実肥大期には秋雨前線や低気圧、台風 24 号（9/30）、25 号（10/5～10/6）の影響で曇りや雨の日が多く、また、台風に伴う強風により倒伏が発生した。全般的に 9 月は平年より雨が多く、日照時間が少なく、10 月は降水量、日照時間も平年並みであった。収穫時期には晴天に恵まれ収穫作業は順調に進んだ。病虫害では、九州全体でハスモンヨトウの発生が目立ったこと、「すずおとめ」作付け地域で葉焼病の被害がみられた以外にはいずれも平年並みであった。

以上のように本年は、7 月、8 月の高温乾燥により出芽不良と初期生育が抑制され生育量の確保が不十分であったこと、莢伸長～子実肥大期にかけて天候不良により子実肥大が抑えられ小粒傾向となったことから、九州全体の単収は 152kg/10a にとどまり、前年度との単収対比で 95%、平均収量対比で 92%となった。

県別の平均収量では熊本県、鹿児島県を除いて下回り、前年との収量対比では主産県の福岡で 97%、佐賀で 92%となったほか、長崎県で 77%、大分県で 94%、宮崎県で 97%となった。全国的には北海道で低温、日照不足及び多雨の影響で単収が前年度対比で 84%と大幅に低下したほか、関東以西の地域では高温乾燥による出芽不良と生育抑制、台風等の被害により大幅に減収し、特に東海で前年度対比 44%、近畿で 52%と激減した。これらの結果、全国の単収は前年対比 86%、平均収量対比 86%の 144kg/10a となった。

収穫量は、九州では作付面積が前年対比 99%、単収が前年対比で 95%とともに減少したため収穫量は前年対比 94%の 32,600t となり、2,100t 減少した。また、全国では作付面積が前年対比 98%で、単収が前年対比 86%と減少したため、収穫量は前年対比 84%の 211,300t で、41,700 減少した。

（大豆・資源作物育種グループ 高橋 将一）

平成30（2018）年度大豆作付面積と収穫量

県別	作付 面積	10a当 収量	10a当		前年との比較					
			収穫量	平均収量 対比	作付面積		10a当収量		収穫量	
					対差	対比	対比	対差	対比	
	ha	kg	t	%	ha	%	%	t	%	
全国	146,600	144	211,300	86	△ 3,600	98	86	△ 41,700	84	
九州	21,400	152	32,600	92	△ 300	99	95	△ 2,100	94	
福岡	8,280	156	12,900	92	△ 130	98	97	△ 600	96	
佐賀	8,000	170	13,600	91	△ 150	98	92	△ 1,500	90	
長崎	468	90	421	81	19	104	77	△ 104	80	
熊本	2,430	149	3,620	93	△ 10	100	106	180	105	
大分	1,630	87	1,420	86	△ 70	96	94	△ 160	90	
宮崎	250	109	273	103	17	107	97	12	105	
鹿児島	364	107	389	98	36	111	108	64	120	
沖縄	0	42	0	124	0	nc	79	0	nc	

注) 農林水産省大臣官房統計部・農林水産統計Webサイト(平成31年2月25日公表)より引用。△は減少。